

小児における生活環境と齲蝕罹患に関する統計学的検討

○合田義仁、稲田絵美、村上大輔、岩崎智徳、佐藤秀夫、菅 北斗、橋口真紀子、山本祐士、南 彩佳、山崎要一
鹿大・院医歯・小児歯

【目的】

近年、子どもを取り巻く環境は、家族形態などの多様化により複雑化してきている。乳歯列期の小児は、自身での口腔衛生管理は難しいため、周囲環境の影響を少なからず受けていると考えられる。そこで、我々は、生活環境とう蝕罹患率との関連性について調査を行った。

【対象と方法】

対象は、平成21年から28年まで、当科に初診で来院した3歳から5歳の患者472名とした。問診票、口腔内診察表、デンタルエックス線写真、診療録を基に、「家族構成」「間食状況」「口腔衛生習慣」などの生活環境を調べ、これらの因子とう蝕罹患との関連性について、統計学的検討を行った。

【結果】

「出生順」では、第三子以上が、第一子に比べ有意にDMF歯が高かった。「保護者の就労状況」では、専業主婦の場合と共働きの場合で、有意な差を認めなかったが、片親の場合、両者に比べ有意にDMF歯が高かった。「間食の種類」では、菓子を間食としている子どもの数が圧倒的に多かった。また、「間食の回数」では、回数を決めていない場合、一回のみの子どもと比べると有意にDMF歯が高かった。「仕上げ磨きの状況」では、保護者の仕上げ磨きが有効であること、また、「フッ素塗布の経験」においては、フッ素塗布の経験がある方が、う蝕に罹患しにくいことが明らかになった。

【考察】

本調査結果から、「家族構成」「間食状況」「口腔衛生習慣」などの、子どもの周囲環境が、う蝕の罹患に影響を及ぼすことを統計学的に示すことができた。このことから、周囲環境を考慮した口腔衛生指導の重要性が明確になった。

小児における口呼吸と食べ方の関連性について

○辻井利弥、稲田絵美、村上大輔、齊藤一誠*、中島 努*、野上有紀子*、白澤良執、窪田直子、武元嘉彦、森園 健、早崎治明*、山崎要一
鹿大・院医歯・小児歯*、新大・院医歯・小児歯

【目的】

口呼吸は口唇閉鎖力との関わりが示唆されており、口腔周囲筋の運動により行う摂食にも関与していると考えられるが、これまで両者は客観的に評価されていない。本研究では口呼吸と食べ方の関連性をアンケート結果を基に統計学的に検討した。

【対象と方法】

平成21年～24年の期間で近隣幼稚園に通園する3～6歳の児童437名を対象とし、アンケートを実施した。質問項目は「鼻・のど・耳について」「咬み合わせについて」「口腔軟組織について」「食べ方について」など、健康状態や生活習慣に関する、全39項目とした。

アンケートの結果から、口呼吸に関係がある因子7項目と食べ方に関する9項目を抽出し、両者の関連性を χ^2 検定により検討した。

【結果】

口呼吸に関係がある因子のうち、「日中鼻がつまりやすい」「日中よく口をあけている」「口を開けて寝ることがある」「口がよく乾いている」「唇にしまりがない」の5項目において、食べ方と有意に関連性が認められた。食べ方についての質問項目の中で、口呼吸と特に相関が強い項目として抽出されたのは「クチャクチャ音を立てて食べている」「食べる時に口を開けている」「やわらかい食べ物を好む」「よく噛んでいない」の4項目だった。

【考察】

今回の調査により、小児における口呼吸と食べ方の両者に関連性が認められた。このことから、口呼吸を改善することで小児の摂食嚥下機能を向上につながる可能性があることが示唆された。